

# 平成18年度病虫害発生予報第6号

平成18年8月3日  
鳥取県病虫害防除所

## 予報の概要 [ 参考 ]

区分	農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	いもち病(穂いもち)	やや遅い	少ない
		紋枯病	-	平年並
		白葉枯病	-	やや多い
		ニカメイガ	やや早い	やや少ない
		セジロウンカ	-	平年並
		トビイロウンカ	-	平年並
		斑点米カメムシ類	-	やや多い
		コブノメイガ	平年並	やや少ない
	ダイズ	紫斑病	平年並	平年並
		ハスモンヨトウ	平年並	やや少ない
カメムシ類		平年並	やや多い	
果樹	ナシ	黒斑病	-	やや少ない
		ハダニ類	-	やや多い
		シンクイムシ類	平年並	多い
		果実吸蛾類(ヤガ)	やや遅い	平年並
	カキ	うどんこ病	平年並	平年並
		炭疽病	平年並	平年並
	リンゴ	カキノヘタムシガ	平年並	やや少ない
		斑点落葉病	平年並	平年並
果樹共通	ハダニ類	-	やや多い	
野菜	ネギ	カメムシ類	-	多い
		軟腐病	平年並	やや多い
		白絹病	平年並	平年並
		黒斑病	平年並	平年並
		ネギハモグリバエ	平年並	平年並
		ネギアザミウマ	平年並	平年並
	ナガイモ	シロイチモジヨトウ	平年並	平年並
		炭疽病	平年並	平年並
		ヤマノイモコガ	平年並	平年並
		ハダニ類	平年並	やや多い
	シバ	シロイチモジヨトウ	平年並	平年並
		スジキリヨトウ	平年並	平年並
	キャベツ ブロッコリー	シバツトガ	平年並	平年並
		ハスモンヨトウ	平年並	平年並
	ハイマダラノメイガ (ダイコンシンクイムシ)	平年並	平年並	

## 気象予報 ( 抜粋 )

1か月予報(7月29日～8月28日:7月28日、広島地方気象台発表)  
向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並、日照時間は平年並が多いでしょう。

< 可能性の大きな気温経過 >

期 間	平均気温
7月29日 ~ 8月4日	平年並
8月5日 ~ 11日	平年並か高い
8月12日 ~ 25日	平年並か高い

## 普通作物

### [イネ]

#### 1 いもち病（穂いもち）

##### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域  
発生時期 やや遅い  
発生量 少ない

##### (2) 予報の根拠

ア イネの出穂期は平年よりやや遅いと予想される。

イ 7月下旬現在、一部の中山間地では葉いもちの多発生ほ場が散見されるものの、全体の葉いもち発生ほ場率は11.2%（平年：33.8%、）で、平年と比較して少ない発生となっている。また、全般に病斑の進展も緩慢となっている。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、本病の発生を助長しない。

##### (3) 防除上注意すべき事項

予防防除を基本とし、粉剤又は液剤を使用する場合は、穂ばらみ期及び穂揃期の防除を必須とする。粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して水面施用する。

#### 2 紋枯病

##### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域  
発生量 平年並

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、発生ほ場率は29.2%（平年：41.6%）と平年に比較してやや少ない発生となっている。

イ 8月1日現在、県予察ほ場における発生は、平年並となっている。

ウ イネの茎数は平年並となっている。

エ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、発生に好適である。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 出穂期頃までに防除を行う。なお、コシヒカリの防除の目安は、穂ばらみ期の発病株率が18%程度とする。

イ 残暑などにより病勢進展が衰えず出穂後の防除が必要な時は、粉剤等により追加防除を行う。

### 3 白葉枯病

#### (1) 予報の内容

発生地域 常習発生地及び浸冠水地帯  
発生量 やや多い

#### (2) 予報の根拠

8月1日の調査において、7月20日前後に浸冠水した水田の一部で初発生が確認された。

#### (3) 防除上注意すべき事項

病害虫発生予察指導情報(イネ：白葉枯病)(平成18年7月20日付)を参照のこと。

### 4 ニカメイガ(第2世代)

#### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域  
発生時期 やや早い  
発生量 やや少ない

#### (2) 予報の根拠

ア 予察灯、フェロモントラップにおける誘殺数は平年より少ない。

イ 7月下旬現在、現地ほ場における発生は平年より少ない。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、本虫の発生を助長する。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 現在、本種を対象とした防除は必要ないが、8月上旬に心枯茎率1.5%以上または被害株率10%以上の場合、8月中旬(幼虫の発生最盛期)に防除を行う。

イ 近年、一部の地域では発生が増加傾向にあり、局地的に多発生ほ場が散見されているので、ほ場の発生動向に注意する。

### 5 セジロウンカ

#### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域(特に沿岸部)  
発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 予察灯の誘殺数は、平年より少ない。

イ 7月下旬現在、発生ほ場率は54.8%(平年：67.0%)、一株当たりの平均成幼虫数は1.1頭(平年1.7頭)で平年よりやや少ない。

沿岸部を中心に一部地域では、一株当たり成幼虫数が、10頭を超えるほ場も散見されている。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、本虫の発生を助長する。

#### (3) 防除上注意すべき事項

8月上旬に一株当たり成幼虫数が10頭以上みられる場合、防除指針等に従い粉剤等で防除を行う。

### 6 トビイロウンカ

#### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域(特に沿岸部)  
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月第4半旬現在、予察灯への誘殺数は平年よりやや少ない。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、本虫の発生を助長する。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 現在、本虫を対象とした防除は必要ない。しかし、ほ場間差が大きいいため、各ほ場における生息密度および発生予察情報に注意する。

イ 8月中旬頃の要防除水準は、1株当たり1頭以上とする。

7 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 水田周辺のイネ科雑草地では、アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソミドリカスミカメ類、ホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシなどが発生している。

7月中旬現在、捕虫網5往復10回振り平均すくい取り虫数は、137.2頭(平年:平成10~17年、141.5頭)で、平年並の発生となっている。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高いと予想されており、本虫のイネへの加害活動に好適な条件となっている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 穂揃い期~乳熟初期の基本防除を徹底する。その後も発生の多い場合には、7~10日間隔で1~2回の追加防除を行う。特に、周囲より早く出穂するほ場では、被害が集中する恐れがあるため注意を要する。なお、防除は地域一斉で行うと効果が高い。

イ イネ科雑草地・畦畔などはカメムシ類の増殖源となるので、出穂20日前に草刈りを行ったほ場では、再生したイネ科雑草が穂をつける前に再度草刈りを行う。また、出穂20日前頃に水田周辺のイネ科雑草地・畦畔などの草刈りを行っていない場合は、穂揃い期から乳熟初期に草刈りを行い、直ちに防除する。

ウ 水田内で穂をつけたヒエ類は、カメムシ類の発生を助長するので直ちに取り除く。

エ 要防除水準は、出穂後の本田における捕虫網50回振りすくい取り虫数が4頭以上の場合とする。

8 コブノメイガ

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生時期 平年並

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地ほ場での発生は少ない。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、本虫の発生を助長する。

(3) 防除上注意すべき事項

現在、本虫を対象とした防除は必要ない。しかし、発生が多いほ場では、被害発生初期(8月中旬頃)に、防除指針等に従って粉剤又は粒剤を散布する。

## 【ダイズ】

### 1 紫斑病

#### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 大豆の開花期は平年並となっている。

イ 本病の莢への感染に好適な時期にあたる8月の降水量は、平年並と予想されている。

#### (3) 防除上注意すべき事項

防除指針等に従い、開花期の25～30日後に薬剤散布を行う。

### 2 ハスモンヨトウ

#### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生時期 平年並

発生量 やや少ない

#### (2) 予報の根拠

ア フェロモントラップによる7月の総誘殺数は、県予察ほ(鳥取市橋本)では平年に比べて少ない。また、湯梨浜町、鳥取市河原町の総誘殺数も、平年より少ない。

イ 7月下旬現在、現地ほ場の発生は認められていないが、8月上旬以降、幼虫による被害が発生し始めると予想される。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、本虫の発生をやや助長する。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 若齢幼虫は集団で葉裏の葉肉を食害するために表皮が残り白変葉となる。発生初期の防除は、白変葉の発生か所を中心に、捕殺(葉ごとの切除)あるいは粉剤等のスポット散布が有効である。

イ 幼虫が老齢になると薬剤の効果が劣るため、早期発見と早期防除に努める。

### 3 カメムシ類

#### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生時期 平年並

発生量 やや多い

#### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、予察灯の誘殺数は平年並である。

イ 大豆の開花期は平年並となっている。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、本虫の発生を助長する。

#### (3) 防除上注意すべき事項

防除指針等に従い、開花期の25～30日後と、その10日後に防除を行う。

## 果 樹

### [ナ シ]

#### 1 黒斑病

##### (1) 予報の内容

発 生 量 やや少ない

##### (2) 予報の根拠

ア 7月19日に行った果実の破袋調査結果によると、県内の平均発病率は2.1% ( 平年5.7% ) であり、平年を下回った。また、徒長枝葉の平均発病率は2.3% ( 平年4.6% ) であり、平年を下回った。ただし、一部で発病の多い園が認められている。

イ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並と予想されている。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 徒長枝葉および収穫果実の発病を防ぐため、収穫前の薬剤散布を徹底する。

イ 薬剤は、8月上旬にアリエッティC水和剤800倍液、8月中～下旬にストロビードライフフロアブル3,000倍液などを散布する。

#### 2 ハダニ類(カンザワハダニ,クワオオハダニ,ナミハダニ)

##### (1) 予報の内容

発 生 量 やや多い

##### (2) 予報の根拠

ア 7月中旬に行った巡回調査の結果、カンザワハダニの平均寄生葉率は3.0% ( 平年:7.2% )、1葉当たりの寄生虫数は0.1頭 ( 平年:0.2頭 )、クワオオハダニは7.5% ( 平年:14.5% )、1葉当たりの寄生虫数は0.3頭 ( 平年:1.2頭 ) とやや少ない発生となっている。

イ 7月下旬現在、県予察ほ場におけるナミハダニの1葉当たりの寄生虫数は0.04頭 ( 平年:0頭 ) と平年並の発生となっている。

ウ 現地のナシ園では、ハダニ類の密度が高く、葉焼け症状を呈しているほ場が一部認められている。

エ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高いと予想されており、ハダニ類の増殖に好適である。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 発生が多い園では、散布量を増やし、枝を洗うように丁寧に薬剤散布する。

イ ハダニ類は、種類によって薬剤効果が異なるので、種類を十分に見極める。また、薬剤の散布にあたっては、連用を避けて、輪番散布する。

ウ カンザワハダニ、ナミハダニにはコロマイト乳剤1,500倍液、カネマイトフロアブル1,500倍液、マイトコーネフロアブル1,500倍液などを、クワオオハダニには前述の剤に加えて、ダニトロンフロアブル1,500倍液などを使用する。なお、薬剤の散布にあたっては、収穫期が近づいているため、農薬の使用基準を遵守する。

#### 3 シンクイムシ類(平成18年7月12日付,病害虫発生予察注意報第3号発表)

##### (1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発 生 量 多 い

( 2 ) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、フェロモントラップにおけるシンクイムシ類の誘殺数はほぼ平年並であるが、越冬世代成虫、第1世代成虫の発生量は平年より多く、次世代成虫の発生量も多くなることが予想される。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高いと予想されており、ナシヒメシンクイの第3世代成虫(第4回成虫)の発生時期は、平年並の8月中下旬頃と予想される。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

平成18年度病害虫発生予察注意報第3号(平成18年7月12日付)を参照のこと。

4 果実吸蛾類

( 1 ) 予報の内容

発生時期 やや遅い

発生量 平年並

( 2 ) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、防蛾灯無設置園での果実被害はほとんど認められていない。

イ ナシの生育は平年より3日程度遅い。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高いと予想されており、成虫の加害活動にやや好適である。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

ア 豊水の無袋栽培では黄色蛍光灯の点灯を8月から始める。点灯する時間は、日の入り30分後から日の出30分前とし、2週間おきに点灯及び消灯時刻を変更する。

イ 網掛けを行っている果樹園では、風などによる網の破れに注意する。

[ カ キ ]

1 うどんこ病

( 1 ) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

( 2 ) 予報の根拠

ア 昨年の本病の発生量は平年並であったため、越冬菌密度は平年並と見込まれる。

イ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並と予想されている。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

8月上旬にストロビードライフフロアブル3,000倍液、8月下旬にスコア水和剤10の3,000倍液などを散布する。

2 炭疽病

( 1 ) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

( 2 ) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地のカキ園(富有)での発病は、ほぼ平年並となっている。

イ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並と予想されている。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

ア 8月上旬にストロビードライフフロアブル3,000倍液、8月下旬にスコア水和剤10の3,000倍液などを散布する。

イ 現在、発病の認められている新梢および果実は見つけ次第取り除く。

### 3 カキノヘタムシガ

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 やや少ない

#### (2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場の予察灯におけるカキノヘタムシガ第1回成虫の総誘殺数はやや少なかった。

イ 第2回成虫の発生最盛期は平年並の8月上旬頃と見込まれる。

#### (3) 防除上注意すべき事項

8月初旬にスミチオン水和剤40の1, 200倍液などを散布する。多発園では8月15日頃にアグロスリン水和剤2, 000倍液などを追加散布する。

## [ リンゴ ]

### 1 斑点落葉病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地のリンゴ園での発病は、ほぼ平年並となっている。

イ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並と予想されている。

#### (3) 防除上注意すべき事項

薬剤は8月上旬（早生種収穫前）にアリエッティC水和剤800倍液を、8月下旬（早生種収穫後）にオキシラン水和剤800倍液を散布する。

### 2 ハダニ類

#### (1) 予報の内容

発生量 やや多い

#### (1) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場では平年並の発生となっている。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高いと予想されており、ハダニ類の増殖にやや好適である。

#### (3) 防除上注意すべき事項

発生が認められた場合は、コロマイト乳剤1, 500倍液、カネマイトフロアブル1, 500倍液などを散布する。

## [ 共通（ナシ、カキ、リンゴ） ]

### 1 カメムシ類（平成18年5月11日付，病害虫発生予察注意報第2号発表）

#### (1) 予報の内容

発生量 多 い

#### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬に行ったナシ園における巡回調査の結果、平均被害果率は0.9%（平年：1.5%）であり、ほぼ平年並の被害であった。

イ 予察灯における7月のチャバネアオカメムシ総誘殺数は、八頭町で1, 277頭



( 平 年 : 6 5 2 . 8 頭 ) 、 河 原 町 で 6 3 2 頭 ( 平 年 : 8 1 5 . 5 頭 ) 、 湯 梨 浜 町 で 4 0 頭 ( 平 年 : 1 4 9 . 4 頭 ) 、 北 栄 町 で 4 2 6 頭 ( 平 年 : 2 1 2 . 0 頭 ) で あり 、 地 域 に よ っ て は 平 年 値 の 2 倍 程 度 と 多 か っ た 。

ウ 気 象 予 報 に よ る と 、 向 こ う 1 か 月 の 気 温 は 平 年 並 か 高 い と 予 想 さ れ て お り 、 カ メ ム シ 類 の 加 害 活 動 に 好 適 で あ る 。

( 3 ) 防 除 上 注 意 す べ き 事 項

ア 被 害 や 飛 来 状 況 は 、 ほ 場 間 差 が 大 き い た め 、 園 内 外 を こ ま め に 見 回 り 早 期 発 見 に 努 め 、 被 害 果 実 や カ メ ム シ 類 の 発 生 が 多 い 場 合 は 早 急 に 防 除 を 行 う 。

イ 防 除 は 、 カ メ ム シ 類 が 飛 来 す る 夕 方 か 早 朝 が 効 果 的 で あ る 。 ま た 、 移 動 性 が 高 い た め 、 広 域 的 な 防 除 に 努 め る 。

イ 薬 剤 は 樹 種 ご と の 防 除 暦 を 参 考 と す る 。

ウ 樹 種 に よ っ て は 収 穫 間 近 と な っ て い る の で 、 農 薬 の 使 用 基 準 を 遵 守 す る 。

## 野 菜

### [ ネ ギ ]

#### 1 軟 腐 病

( 1 ) 予 報 の 内 容

発 生 時 期 平 年 並

発 生 量 や や 多 い

( 2 ) 予 報 の 根 拠

ア 7 月 下 旬 現 在 の 発 生 量 は 平 年 並 で あ る 。

イ 気 象 予 報 に よ る と 、 向 こ う 1 か 月 の 気 温 は 平 年 並 か 高 く 、 降 水 量 は 平 年 並 と 予 想 さ れ て お り 、 や や 多 い 発 生 量 が 見 込 ま れ る 。

( 3 ) 防 除 上 注 意 す べ き 事 項

ア ネ ギ が 傷 つ く よ う な 無 理 な 土 寄 せ お よ び 追 肥 な ど の 作 業 で 発 病 が 助 長 さ れ る の で 注 意 す る 。

イ 収 穫 1 ~ 2 か 月 前 の 土 寄 せ 時 の 直 前 に 、 オ リ ゼ メ ー ト 粒 剤 1 0 a 当 たり 6 kg を 畝 の 上 側 か ら 株 元 散 布 す る 。

ウ 最 終 土 寄 せ 前 に ナ レ ー ト 水 和 剤 1 , 0 0 0 倍 液 を 散 布 す る 。 土 寄 せ 後 に コ サ イ ド D F 1 , 0 0 0 倍 液 ま た は Z ボ ル ド ー 5 0 0 倍 液 を 7 ~ 1 0 日 間 隔 で 2 ~ 3 回 散 布 す る 。

#### 2 白 絹 病

( 1 ) 予 報 の 内 容

発 生 時 期 平 年 並

発 生 量 平 年 並

( 2 ) 予 報 の 根 拠

ア 7 月 下 旬 現 在 の 発 生 量 は 平 年 並 で あ る 。

イ 気 象 予 報 に よ る と 、 向 こ う 1 か 月 の 気 温 は 平 年 並 か 高 く 、 降 水 量 は 平 年 並 と 予 想 さ れ て お り 、 平 年 並 の 発 生 量 が 見 込 ま れ る 。

( 3 ) 防 除 上 注 意 す べ き 事 項

ア 8 月 下 旬 ま で に 最 終 土 寄 せ を す る 作 型 で は 、 最 終 土 寄 せ 前 に リ ゾ レ ッ ク ス 粉 剤 1 0 a 当 たり 2 0 kg を 畦 の 両 側 か ら 株 元 に 散 布 す る 。

イ 最 終 土 寄 せ が 9 月 以 降 の 作 型 で は 、 8 月 上 旬 に モ ン カ ッ ト 粒 剤 を 1 0 a 当 たり 4 kg を 畝 の 上 側 か ら 株 元 散 布 す る 。 ま た は 、 モ ン カ ッ ト フ ァ イ ン 粉 剤 2 0 D L の

10 a 当たり 10 kg、フロンサイド粉剤 10 a 当たり 15 kg などを畝の両側から株元に散布する。

ウ 8 月中旬以降に発病がみられる場合は、モンカットフロアブル 40 の 2,000 倍液を株元に散布する。

### 3 黒斑病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 7 月下旬現在の発生量は平年並である。

イ 本病は気温が 25 前後で、降雨が多い場合に多発する。

ウ 気象予報によると、向こう 1 か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並と予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 根傷み、肥料不足となると発病しやすいので、肥培管理に注意する。

イ 薬剤は、ダコニール 1000 の 1,000 倍液、ポリペリン水和剤 1,500 倍液などを予防散布する。発病後は、ロブラール水和剤 1,000 倍液などを散布する。

### 4 ネギハモグリバエ

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 7 月下旬現在の発生量は、平年並である。

イ 気象予報によると、向こう 1 か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並と予想されており、今後も平年並の発生が見込まれる。

#### (3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、アグロスリン乳剤 2,000 倍液、アクタラ顆粒水溶剤 1,000 ~ 2,000 倍液などを散布する。

### 5 ネギアザミウマ

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 7 月下旬現在の発生量は、一部の地域でやや多いが、全体的には平年並である。

イ 気象予報によると、向こう 1 か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並と予想されており、今後も平年並の発生が見込まれる。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤は、アグロスリン乳剤 2,000 倍液、モスピラン水溶剤 2,000 倍液、アドマイヤーフロアブル 2,000 ~ 4,000 倍液、アクタラ顆粒水溶剤 1,000 ~ 2,000 倍液、ランネート 45 DF 1,000 ~ 2,000 倍液、およびマラバッサ乳剤 800 ~ 1,000 倍液など、7 ~ 10 日間隔で薬剤の系統をかえて散布する。

イ 同一、同系統の薬剤を連用すると効果が低下する恐れがあるので、ローテーション

ン散布に努める。

## 6 シロイチモジヨトウ

### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬における、県予察ほ場でのフェロモントラップの誘殺数はやや少ない。

イ 現地調査ほ場における発生は見られなかった。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、今後、平年並の発生が見込まれる。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 8月上旬現在、幼虫の発生がみられるほ場では、早急に防除を行う。

イ 次世代の幼虫の発生時期は9月上中旬と予想され、この時期を重点に防除を行う。

ウ 防除適期は若齢幼虫の時であり、この時期を逃すと防除困難となる。防除薬剤は、ラービフロアブルの750～1,000倍液、アタブロン乳剤2,000倍液、コテツフロアブル2,000倍液などを用いて、5～7日間隔で2回程度防除を行う。

## [ ナガイモ ]

### 1 炭疽病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在の発生量は平年並である。

イ 本病は降雨によって発病が増加する。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。

イ 8月上旬現在、茎葉が繁茂して薬液がかかりにくい状態なので、丁寧に薬剤を散布する。

ウ 8月の薬剤防除には、ダコニール1000の1,000倍液またはジマンダイセン水和剤600倍液などを予防散布する。

### 2 ヤマノイモコガ

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア フェロモントラップにおける成虫の誘殺数は平年並である。

イ 7月下旬現在の幼虫の発生量はやや少ない。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、今後も平年並の発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本害虫は、高温乾燥条件及び、風通しの悪いほ場で被害が増加するので、早期発見に努める。

イ ガードジェット水和剤 2,000 倍液、トレボン乳剤 1,000 倍などを 7～10 日間隔で 2 回程度散布する。薬液が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧に行う。

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在の発生量は、局地的に発生量のやや多いほ場が見受けられるが、全体的には平年並である。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並と予想されており、今後やや多い発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 高温乾燥条件で発生が増加する。薬剤防除は、茎葉が繁茂して薬液がかかりにくいので、散布量を多めにして丁寧に散布する。

イ 防除薬剤は、コテツフロアブル 2,000 倍液、ニッソランV乳剤 1,000～1,500 倍液、コロマイト乳剤 1,000 倍液などを使用する。

4 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場において、フェロモントラップによる成虫の誘殺数はやや少ない。

イ 現地調査ほ場における発生は見られなかった。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並と予想されており、今後、平年並の発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 8月上旬現在、幼虫の発生がみられるほ場では、早急に防除を行う。

イ 次世代の加害幼虫の発生時期は9月上中旬と予想され、この時期を重点に防除を行う。

ウ 防除適期は若齢幼虫の時であり、この時期を逃すと防除困難となる。防除薬剤は、トレボン粉剤DLの10a当たり4kg、デルフィン顆粒水和剤 1,000 倍液などを用いて、5～7日間隔で2回程度防除を行う。

[シバ]

1 スジキリヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア フェロモントラップによる成虫の誘殺数は平年並である。
- イ 現地調査ほ場において、若齢幼虫による白化葉はみられていない。
- ウ 7月下旬現在、生産シバにおける卵塊数はやや少ない。
- エ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、今後も平年並の発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ふ化直後の8月上～中旬に、ダイアジノン粒剤5の10a当たり6kgまたはオルトラン粒剤10a当たり10kgを散布する。
- イ その後も幼虫の発生がみられる場合は、ダイアジノン乳剤40またはカルホス乳剤の1,000倍液などを散布する。

2 シバツトガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア フェロモントラップによる成虫の誘殺数は平年並である。
- イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、今後も平年並の発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 成虫の発生ピークは、平年並の7月下旬～8月上旬であると考えられる。
- イ 8月上～中旬に、ダイアジノン粒剤5の10a当たり6kgまたはオルトラン粒剤10a当たり10kgを散布する。
- ウ その後も幼虫による被害がみられる場合は、ダイアジノン乳剤40またはカルホス乳剤の1,000倍液などを散布する。

【キャベツ、ブロッコリー】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬までのフェロモントラップによる成虫の誘殺数は、平年並となっている。
- イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、今後、平年並の発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 夏期の高温乾燥条件で多発しやすい。また、中齢幼虫以降は薬剤が効きにくくなるので、若齢幼虫期の防除を徹底する。
- イ キャベツの防除薬剤は、ラービン水和剤75の1,000～1,500倍液、アタブロン乳剤2,000倍液、アフーム乳剤1,000～2,000倍液などを散布する。
- ウ ブロッコリーの防除薬剤は、PAP乳剤(エルサン、パプチオン)の1,000倍液などを散布する。

## 2 ハイマダラノメイガ（ダイコンシンクイムシ）

### （1）予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

### （2）予報の根拠

ア 7月下旬現在、幼虫による被害はほとんどみられていない。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されており、今後、平年並の発生が見込まれる。

### （3）防除上注意すべき事項

ア 本虫は高温少雨、残暑の厳しい年に多発生し、内部の未展開葉や成長点部が食害されるので注意する。

イ 特に、は種直後から定植直後までの被害が大きいため、発生ほ場では防除を徹底する。

ウ 育苗施設では、防虫寒冷紗被覆（網目1.5mm以下が好ましい）を実施し、害虫の侵入を防ぐ。

エ キャベツの防除薬剤は、スピノエース顆粒水和剤5,000倍液、アフーム乳剤1,000～2,000倍液、トルネードフロアブル2,000倍液などを散布する。

オ ブロッコリーの防除薬剤は、PAP乳剤（エルサン、パプチオン）の1,000倍液などを散布する。

## [おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。詳しい内容は、独立行政法人 農薬検査所の「農薬登録情報検索システム」から検索できます。（<http://www.acis.go.jp/>）

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、  
周辺への飛散には充分注意しましょう。**

### < 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報、現地巡回調査結果などの指導情報、フェロモントラップ調査結果、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL：0857-53-1345、FAX：0857-53-5647

E-mail：byogaichu@pref.tottori.jp 又は kttr0301@sp.jppn.ne.jp

次回の予報発表は、8月24日（木）の予定です。